

史遊会通信

No.229号
平成26年
3月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

二月講演要旨

政治家の一詩を巡る春蘭と秋菊

鯨 游 海

海江田万里氏は、前回の総選挙で民主党が大敗して野田佳彦前総理に代って党首に就いた際、記者会見で自作の漢詩一首を披露した。

無題

(作・海江田万里)

臘月扶桑戰鼓鳴

臘月ろうげつの扶桑ふそうに 戰鼓せんこ鳴り

寒天寡助計無成

寒天さむかに助け寡すくなく計はか成りる無し

將軍功盡萬兵斃

將軍功たう尽くきて 万兵たう斃る

粉骨碎身全此生

粉骨碎身せいこの生まことを全まうせん

(注) 臘月＝十二月

さて、この詩に関し年が改まるや二つの評論が相次いで公になった。一は「典故の用法

に無知な和臭ある駄作」とする漢学者加地伸行教授の厳しい評、他は「現代政治家による希少価値ある佳作」とする漢詩連盟岡崎満義会長の温情溢るる評の硬軟両論である。加地教授が産経新聞(1/27)に書いた要旨は次の通り。「氏は全此生を(敗れた党再生の為に余生を最大限努力する)という意味に使っているが、莊子の養生主篇(注)にいう全生の意味は(生命に大切なことは中庸で、中庸のようにすれば身を安全に保て＝保身、生命を無傷に保つことが出来る＝全生)要は自然の在り方に従えば長生き出来ますよというのが『保身、全生』

例会のお知らせ

◎ 三月例会

日時 平成二十六年三月二十六日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 隆恵氏

テーマ 天智天皇の謎解き

四月号自由執筆 千坂精一、中込勝則、

新井宏の諸氏 締切三月末

◎ 四月例会

日時 平成二十六年四月二十三日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 鍋屋次郎氏

テーマ 高山右近マニラでの殉教に至るまで

五月号自由執筆 柴田弘武、瀧澤中、

鍋屋次郎の諸氏 締切四月末

の意味。政争といった権力闘争に粉骨砕身する在り方とは全く無縁な話し。所が氏は全生を現代日本語風に解し使っている。

こういう和臭ある作品は人さまの前には出さないもの。無教養をさらすことになるからだ。それを敢えてする。そのような人物が一党を率いることが出来るのか。

また、この詩には敗者の悲しみが見られない。これで将たり得るのか……

(注) 莊子「縁督以為經可以保身可以全生……」

この秋霜烈日の厳しい論に対し、漢詩愛好普及会の岡崎満義会長から擁護の反論が出た。「今、政治家の中で正規の漢詩を作れるのは海江田さん唯一人だ。貴重な文人政治家である。加地教授は莊子の言葉の意味を海江田氏がとり違えて使ったと切り捨てられたが、私はずんなりと理解出来た。唯これだけで和臭とはいえず、十分に漢詩として通用する。

奥深い典故を重んじるのはよいとして、典故の森の入口でうろろしているような初心者なりの受け取り方があっていいのではないか。加地教授には漢詩の魅力を広め、漢詩人口を増やす方向で力を貸して欲しい」と訴え次韻した応酬詩を海江田氏に贈った。

酬海江田萬里先生作詞（作・岡崎満義）

扶桑天晦朔風鳴○ 扶桑の天晦く 朔風鳴る

東北深憂興未成○ 東北の深憂興未だ成らず

南海近來多外患 南海近來 外患多し

濟民經世恃先生○ 濟民經世は 先生に恃まん

更に返す刀で加地教授にも一詩を寄せた。

寄孤劍樓加地伸行先生（作・岡崎満義）

故友自稱孤劍樓 故友(注)自ら称す 孤劍樓

筆鋒太鋭撲時流 筆鋒太だ鋭く時流を撲つ

此詩有疵心情直 此詩疵有るも心情直なり

請以溫情樂應酬 請う温情以て応酬を 樂しめん

(注) 故友＝旧友（加地氏とは同期同窓の由）

政治家の一詩を巡る夫々の立場からの硬軟両説をどう捉える可きか。私は「春蘭秋菊俱に廃す可からず」と思う。秋霜烈日の厳しさが高尚な言語芸術を守り育て、また春陽白雪の優しさが漢詩愛好者を増やすであろう。

私も次韻したエールを海江田氏に贈ろう。

酬海江田萬里先生作詩（作・鯨游海）

墨守綸言逐鹿鳴○ 綸言を墨守し鹿を逐つて鳴くも

刀撓矢盡夢難成○ 刀撓れ矢尽きて夢成り難し

天時地利不如和 天の時地の利は 和に如かず

捲土重來完汝生○ 捲土重來汝が生を完うせよ

講演主題終了後、鯨游海氏が、近作漢詩を五首披露した。余白があるので収録する。

新型萬能細胞 世界遺産和食

誰創奇蹟細胞新 三蔬一汁不饒材

自在萬能如鬼神 非必珍肴食指催

翻弄千年生物學 四季旬魚初物菜

和風白衣可憐人 紅梅白飯割烹魁

靖国神社 京兆尹之黒錢

戰犯何祠重罪人 收賄私藏三萬兩

聞言逝者總為神 虛言呼嘘嘘呼汗

忠魂盍祀會津士 何顔相迎五輪客

況復無辜殉國民 悔使彼登都政壇

樂天金鷲棒球隊

鬼乎天狗神乎佛

三八連勝負不知

隱忍九年漸羽搏

千山萬里凱歌馳

（追加した五首分につきましては、時間の関係で著者校正是未了です。）

(了)

自由原稿

生と死はつながっている

三戸岡 道夫

地球の歴史で一番の謎は生命の起源である。無機物の地球から、どうして有機物が生まれたのか。それは何億年という地球の歴史の中のある時点で、突然変異によって、有機物、すなわち生命の源が生まれたという説明が、一般的である。

生命の源といっても、最初はバクテリアのようなものだったのかもしれないが、とにかく生命の源が生まれたのである。その後長い時間をかけて進化し、人間にまで達したのである。しかし、なぜ突然変異が起きたのか、またその突然変異の内容となると、それは不明である。

すなわち無機物と有機物（生命）とは、断絶しているのである。

しかし最近、それは、「そうではない」ということが明らかになってきた。無機物と有機物とは、連っているというのである。それは、（今から三十八億年前、海の底でいくつかの物質が化学反応して、生命のきっかけとなる物質が出来た。それが核酸やタンパク質という機能を持った物質に進化し、機能を高度化

させて、生命という複雑な化学機械にまで進化した）

というのである。

すなわち生命は突然変異によって出来た神秘的なものではなくて、「物質の化学反応」によって出来たものであり、あくまでも「化学機械」だというのである。

それを証明するものとして、一つの実験がある。一九五三年（昭和二十八年）にシカゴ大学の大学院生が、二つのフラスコをゴム管でつないで、原始大気の中の稲妻に見たてた、電気火花を点火した。数日後、フラスコの中には、アミノ酸などの有機化合物が出来ていたのである。

アミノ酸のような生命物質が、地球上で、無機物から出来たのである。

では、その生まれたばかりの有機物は、どんな状態のものだったのか。バクテリアを例として、眺めてみよう。

バクテリアは、「生きているバクテリア」と、「死んでいるバクテリア」と、「その中間の状態にあるバクテリア」と、三種類に分けられる。たとえば土の中のバクテリアの大部分は、「死にかけている」と「本当の死」との間の、どこかに位置しているのである。そしていい条件が見つかり、生き返ってくるし、そう

ではないと本当に死んでしまうのである。

生命の起源もこれと同じように、

（生きていても、死んでいるともいえない状態）

であり、無機物から有機物が出来たといっても、突然変異で、

（パツ！）

と一気に有機物になったのではなくて、（物質と生命の間を、行ったり、戻ったり、ということを繰り返しながら、少しずつ物質が生命になっていった）

のである。すなわち有機物（生）と無機物（死）とは、断絶しているのではなくて、連続しているのである。

これをバクテリアで言えば、次のような状態である。あるバクテリアの分子は八十パーセントは生きているが、二十パーセントは死んでいる。あるバクテリアの分子は、フィフティ・フィフティ。あるバクテリアの分子は、七十パーセントは死んでおり、生きているのは三十パーセント…、などといった場合である。そして置かれている状況が変わってくると、その比率も変わってくるのである。すなわち、「生きているか」「死んでいるか」ではなくて、生と死の両方に様々な比率を持ちながら、対応しているのである。

生物とはこのような分子の集合体なのであるが、それは単なる集合ではなくて、きわめて精密で複雑な「化学機械」、すなわち「システム」なのである。

生物では、無数の分子、細胞の化学反応が連鎖的に起きていて、そのシステムが正常に作動している状態が健康であり、不正常だと病気、システムを自ら維持できなくなる、あるいは自律的にシステムを復活できなくなると、死というわけである。

従って生命とはどんなシステムかというところ（一定量の分子の集合体であるが、中身が常に入れ代わっているシステムで、いわば「食べて」「燃やして」「排泄し」という行為によって、システムの部品を交換しながら、全体を維持している化学機械である）

ということが出来る。これを「動物平衡」といい、これが生物の本質なのである。

すなわち、「生きている」ということは、分子がシステムに従って機能し、活動している状態のことであり、死とはその機能活動が止ってしまっている場合のことである。

すなわち生と死は、まったく断絶したものでなく、機能の活動状態を言うのであり、連続しているのである。

自由原稿

カラカミ遺跡の弥生製鉄ニュース

新井 宏

「トンボの眼」という会があり、「理系の視点から見た考古学の論争点」と言うシリーズで連続五回の講演をしている。明後日(三月四日)は、その最終回で「弥生時代には製鉄が行われなかったか」というタイトルで話す。

実はこのタイトルを決めたのが、昨年十一月末であるが、その直後の十二月中旬に「老岐のカラカミ遺跡から弥生時代の製鉄遺跡が出土した」というニュースが飛び込んできた。早速、数人の方から「やはり新井さんの言っていた通りでしたね」とのメール等を頂いた。

日本では、製鉄開始は古墳時代後期の六世紀からというのが定説である。それに対して、私は十年以上前から強い疑念を表明していた。理由は、前三世紀から「鉄の使用」を始めていながら八百年間も「製鉄技術を持たなかった」とすれば、歴史学や考古学はその理由を説明しなければならぬからである。しかも、弥生後期から磨製石器の使用が大幅に減少する現象があり、考古学関係者も「製鉄技術」の存在を待ち望んでいた。

しかし、そこに立ちはだかったのが、古墳中期以前の鉄滓はすべて「製鉄滓」ではなく「精錬滓」であるという分析系の金属学者の見解である。

それに対して私の反論は、彼らがあまりにも「たたら製鉄」の経験から学び過ぎているという点にあった。「たたら製鉄」は明治末年まで続く近代的な製鉄法であり、古代の小規模な製鉄法とは大きく異なる。

事実、中世までのヨーロッパでは、製鉄と精錬を同じ炉で行っていた。そのため古墳中期以前の鉄滓をヨーロッパの基準で判定すれば、「製鉄滓」とも「精錬滓」とみなせる場合が多い。だから、経験論によって鉄滓を判定するのではなく、炉の大きさや鉱石の種類を考慮し、それを製鉄理論に基づいて解析しないと判定を誤ると言い続けてきた。第一、「精錬滓」と判定された鉄滓の多くが、中国地方の山間部や阿蘇山麓など内陸から出ており、粗製の鉄素材を輸入して運び込み、そこで精錬することなど不自然である。

さて、新聞のニュースを要約しておこう。魏志倭人伝の一支国「カラカミ遺跡」の堅穴遺跡から、国内初、弥生後期の鉄生産用の地上炉跡(六基)が見つかった。炉形式が韓国南部にみられる炉に似ている。従来、日本の製鉄の始まりは六世紀後半とされていたが、定説の見直しにつながる発見である。

この記事を読めば、誰でも「弥生時代に製鉄が行われていた」と思うに違いない。しかし学術的に言えば、これで弥生製鉄が実証されたわけではない。うっかりすると、逆に振れすぎるのが考古学界である。これからもよく見て行きたい。

自由原稿

中国の覇権拡大と朝鮮半島の混迷(一)

(共産党王朝の行く末)

隆 恵

ここ一・二年の日本を取り巻く環境は、中国共産党王朝の習近平皇帝の覇権主義、北朝鮮の金正恩王の自暴自棄、韓国の朴クネ女王の頑迷さで、風雲急を告げる状況に陥っている。今回は、最近感じている雑感を、過去の歴史になぞらえつつ触れてみたい。

中国の共産党王朝は、建国来長年「経済力は三流、軍事力だけは世界列強レベル」と言う跋扈状態だったが、ここ十年ほどの飛躍的な経済成長で世界第二位の経済超大国となり、「貧乏人の俄か成金」の傲慢さを剥き出しにして、中国の伝統的な大陸国家から世界最強の米国に対抗する陸海空兼備の覇権国家を目指すようになった。この結果、近世の東アジアで唯一の海洋国家であった日本に真つ向からの挑戦を仕掛け、且つ東南アジアのベトナムやフィリピンを震撼させている。

習皇帝とその重臣たちは、一九世紀半ばの阿片戦争以来の列強による長年の屈辱の復讐をと、意気込んでいるに違いない。

中国の歴史で、覇権拡大により近隣諸国を震撼させた王朝は、秦・漢・隋・唐・宋・元・

明・清があるが、その基本政策は相手国に朝貢を求めて中国を宗主国と崇め奉る事を要求するものであった。

但し、元と明はやや異質な戦略を示す。

モンゴル族の元は、相手国の存続を是認する伝統的な朝貢制度ではない征服併合政策を取り、また陸続きの国を併呑するだけでなく、大海軍の渡海作戦による征服を目指したところに特徴があった。元は、中国の北宋の征服に成功するや、隣接の高麗王朝の朝鮮を属州化し、更には渡海して日本征服(元寇)を目論み、南宋の征服に成功するやベトナム(安南)やジャワをも攻略しようとする。しかし、この渡海作戦は全て失敗に終わり、大帝フビライの死後後継の権力争いで自壊して漢民族の明に滅ぼされる。

元に取って代わった明には、アレキサンダー大王や古代ローマ帝国・モンゴル帝国・近世の大英帝国にも匹敵する地球規模のスケールの覇権大国の時代があった。

即ち明の永楽帝は、北西部のモンゴル・チベットの制圧後、東部の朝鮮半島から南部のベトナムも制圧し、更には七度に亘って鄭和に大航海をさせて、東南アジアからインド・アラビア・アフリカ東部にまで朝貢する国を多数従えた。この鄭和の大航海による巨大な版図は、永楽帝の死後宮廷内の抗争により短期間で終わってしまうが、副産物としてベトナム・マレーシア・シンガポール・カンボジア・インドネシア・タイ等の東南アジアに多数の中国人が入植し、その後の約六百年間にかけてのポルト難民(華僑)の移住により、その末裔の中国系の人たちが今日の東南アジア諸国の経済的中心勢力になっている。

さてそれでは、今日の習皇帝率いる共産党王朝は、陸海空の覇権大国として今後長く存続できるのであろうか。

過去の中国の統一王朝は、征服王の大皇帝が死去すると必ず後継者争いの内部分裂で一気に衰退に向かうが、この共産党王朝では完全な世襲制度ではないので、過去のよう事は先ず起きにくい。もつとも、習皇帝は太子党即ち父親が共産党の重鎮だった二世で組成した派閥出身であるから、世襲制度が始まったと言えるかもしれない。

今後の中国を展望すると、低コストの大量労働力を背景とした世界一の工場化による経済成長は、既に東南アジア諸国にとって代わられつつあり、昨近の貧富の格差問題は経済の成長鈍化により更に拡大する事は間違いない、近い将来国の根幹を揺るがす大きな起爆剤となるであろう。その上に、中央の共産党幹部による権力と富の独占と世襲化が明確化し、特に民衆に身近な地方組織の幹部の腐敗と墮落は全国に蔓延しており、中央の綱紀粛正の号令だけでは絶対に解決しない。

そもそも人間の物欲・金銭欲は、何も中国共産党幹部の専売特許ではなく、どの民族でも起きている人間の本質的なものではあるが、「己良ければ、全てよし」意識は中国人の長い歴史上の民族性とも言え、これに加えて四〇年に亘る一人っ子政策の副産物の「子供の小皇帝」化がこれに輪を掛けている。

中国を複雑にさせる問題点として、一般的に中国には九〇%強を占める漢民族と一〇%弱の少数民族がいると言われるが、この一口で漢民族と総称される人たちも広域な東西南北で伝統や文化や言語が全く違う部族の総称と解釈すべきで、清朝以来の周辺の異民族を半ば強権力で包含しているに過ぎない。要するに、中国民族としてのアイデンティティーは、共産党王朝が策定した標準語を共通言語とする一点だけである。

即ち日本のような一億三千万人が金太郎飴のような同質の民族国家ではない。

かてて加えて、既述の自己中心人間が一二億人もいる訳だから、共産党王朝がこの多民族国家を統治するためには、絶えず強権政治と武力弾圧を示威することが延命の鍵を握る。

しかし歴史は、民衆の大半を敵とした国家は長続きしないと言う教訓を残しており、恐らく二・三十年後には共産党王朝は滅亡するであろう。

世界人口の二〇%の人口と百程度の多数部

族の集合体のこの中国を、民主主義で統治する事は極めて至難であり、共産党王朝滅亡後の国家は専制主義の国家にならざるを得ないであろう。さもなければ、百程度の国に大分裂するしかないのではないか。

中国の覇権拡大と朝鮮半島の混迷(二)

(北朝鮮金王朝と韓国朴女王の行く末)

隆 恵

(北朝鮮の金王朝)

この金王朝は、建国約七十年を数年後に控え、第三代の正恩王も三年目を迎えた。

開祖日成王が旧ソ連の支援で建国、のちに中国の支援で朝鮮戦争を勝ち抜き今日の北朝鮮を築き、二代目の正日王は大陸弾道弾と核開発の脅しで、念願である米国との平和条約締結による国際的認知を期待したが、志半ばで他界した。この第二代王は開祖の統治を傍らで見つつ曲がりなりにも建国に携わり王位を継承したが、現在の第三代王は建国や国家経営に何らの貢献もせず、単なる血統による世襲で王位を継承したに過ぎない。

にも関わらず、この第三代王は父親以上に宗主国の中国に楯突いて六か国協議を拒否し、韓国との緊張を更に高め、また米国との休戦協定の破棄を宣言するなど、極めて過激な無頼漢振りを展開している。

この瀬戸際戦略は内政においても、ここ数か月間で父親から継承した重鎮の粛清を相次いで行い、権力基盤の確保に躍起となっている。と言うより、彼に指導力があるのではなく、新しい側近たちが権力と富を握りたいために彼の地位を利用して言うのが、正しい現状分析ではなからうか。

この北朝鮮王国の三代の王を眺めると、開祖の日成が徳川幕府初代家康、第二代の正日が二代將軍秀忠、三代の正恩が三代將軍家光に極めて酷似している。

特に第三代の正恩の手法は、家光の政治手法に酷似している。即ち家光も、豊臣恩顧の外様大名の一掃、実弟駿河大納言忠長の抹殺、家康・秀忠時代からの老練老中の一掃等の恐怖政治で幕府の権威と自らの存在を誇示した。但し、家光と正恩の根本的な違いがある。

それは、正恩と新しい側近の狙いは、民の暮らしなど一切眼中になく、ひたすら己たちの優雅な暮らしを長く保持したいと言う私利私欲であるが、家光のそれは徳川家の安泰と言う私欲もあるが、二度と戦乱時代に戻さないと言う公益があった筈である。

「ならず者国家」の金王国に対しては、日米が主導する国際社会は経済制裁と言う兵糧攻めを長年行ってきたが、一向に落城しないどころか尚一層の軍備増強を行っている。

原因は、中国が陰に陽に「間道」を通じた

兵糧と武器の支援を行う一方、国際社会には説得に難航していると称する二枚舌外交を行っているからである。過去の伝統的な安全保障戦略である「北朝鮮を日米との緩衝地帯化とする」が今でも正しいと考えているからである。しかしこの戦略は、北朝鮮の通常兵器の増強であれば正しいが、北朝鮮の核兵器装備となると、日米韓にとつての脅威は勿論だが、中国自身の安全保障上も極めて由々しき事と悟るべきだが、毛沢東以来の政策変更の勇気がないのであろう。

中国にとつての北朝鮮とは、異民族国家だという事をまず認識する事が重要である。北朝鮮の核装備は、中国からの独立意識の強いチベット族やウイグル族に「核のボタンを持たす」と本質は同じだからである。

核攻撃能力を保持した北朝鮮が、自国の壊滅を覚悟して核兵器による自爆テロを中国に仕掛ければ、一瞬にして北京・上海・重慶も灰塵と化するのである。

過去の歴史でも、中国は朝鮮民族を甘く見て何度も煮え湯を飲まされたことを思い起こすべきで、七世紀初頭に高句麗が隋の攻撃に対して徹底した防衛戦争を行い、この高句麗征伐の失敗から隋は滅亡したし、その後の唐は新羅と軍事同盟を結んで高句麗と百済の征服に成功するが、軍事支援した新羅が今度は裏切つて唐に刃を向け、結局唐は半島から追

い出された。強大国家であつた唐も、朝鮮への介入失敗から、唐の衰退が始まつた。

また後世の十六世紀末に、日本の豊臣秀吉による朝鮮半島の侵略に対して、明が大軍団を派遣して豊臣軍を追い落として李氏朝鮮王朝を復活させるが、その数十年後には李氏朝鮮王朝は満州族の清国に助勢し、恩義ある明を滅亡に追い込む。

北朝鮮が自爆核戦争を仕掛けないように、即ち飼い犬に手否心臓を噛み切らないように危険の種を摘んでおくべしと言いたい。

中国の伝統であつた宦官に北朝鮮をしておく事が、中国自身の身の安全になると悟れと言いたい。

中国の戦略の大転換がない限り、北朝鮮王朝は存続し、正恩王は側近たちには都合の良いロボットなので、在位し続けるであらう。

(韓国の朴クネ女王)

先ずここ数年の韓国の強気的外交姿勢は、前李大統領の後半からこの流れができた。

建国来、日本のコピー商品で米国と欧州での日本のシェアを奪つて経済成長をしてきたが、ここ五六年サムソン電子の世界のビッグワンへの躍進と現代自動車のトップテン入り等で現在の韓国経済は絶頂期を迎えている。いつの時代でも国の富が蓄えられると、その国の外交や軍事の攻勢が始まる。

朴クネ女王は、韓国の女王と言うよりもサムスン王国の女王と考えたら分かりやすい。

彼女は、一部財閥企業によるマクロ経済の好調の陰で、大多数の国民が失業と低収入であえいでいる中、日本叩きを国民のガス抜きに利用している。一方、韓国企業の輸出先としての魅力と反日で共鳴する中国に急速に秋波を送っている。

元々朝鮮は約二千年間、隣国の中国を宗主国と崇め、地政学上中国には逆らえないと言う宿命を負っているとは言え、朴女王のこの外交路線は近視眼的と断言できる。

韓国の独立の保証は、中国に対抗できる米国と日本によつて担保されるのであつて、隣国の中国への迎合策では絶対に担保されない。中国市場の魅力と朝鮮半島の統一の中国の了解を狙っているのだから、韓国を主体とする朝鮮の統一は、中国は絶対に認める筈がない。中国が朝鮮統一を認めるときは、北朝鮮による韓国吸収のときだけである。また輸出市場としての中国は、短期的にはある程度期待できるが、中長期的には中国にとつての韓国メーカーはライバル企業であり、近い将来韓国企業は排斥の対象となるであらう。

彼女は、朝鮮史上三人目の女王である。

即ち初代は、七世紀中頃の統一前新羅の善徳女王、二人目はその後継者の真徳女王であつた。この新羅の二人の女王は、同じ民族の

百済と高句麗の攻撃に耐えかねて異民族の大
 国唐の軍事援助を要請する。これに対する唐
 の回答は、唐の属国化を条件とし二代目の唐
 徳女王はこれを受け入れ、その後継の男王の
 時代に仇敵の百済と高句麗を滅ぼすことに成
 功する。但しその後の新羅は、異民族の属国
 化をよしとせず唐と戦端を開き、最終的には
 唐を駆逐して唐を宗主国とすることで朝鮮の
 統一を成し遂げる。幸い唐の属国化を免れ得
 たのも、唐自身の宮廷内の権力闘争で外征余
 力がなかったという偶然の賜物であった。

歴史上の二人の女王と彼女に通じる事は、
 大局観を持たずに目先の事に拘る近視眼の持
 ち主である。

このサムソン王国は、スマートフォンピ
 ークアウトの数年後には黄昏を迎えるはずで
 あり、そうなるに経済的にも安全保障上も日
 本との協調なくして、韓国の将来はないと悟
 るべきである。

決着済みの従軍慰安婦問題を大袈裟に騒ぎ
 立てて、一般国民に無用なナショナリズムと
 反日意識を持たせる事は、将来の対日友好政
 策への転換に大きな足枷になる事になぜ気が
 付かないのか。

朴女王の能力の限界と言うところか。

(日本の取るべき外交姿勢)

日本は、中国や朝鮮半島の人から見ると、

同じアジア人と言うよりも黄色の欧米人と言
 う意識が根底にある。その理由は、彼らが一
 九世紀の欧米列強の侵略に悩まされたときに
 先進国入りしていた同じ黄色人種の日本が助
 勢をしてくれるものと思いきや、欧米列強と
 同じように侵略したからである。

この点、東南アジア諸国の人たちにとって
 の日本は、欧米列強の植民地から解放してく
 れた救世主と言う意識が残っているのとは根
 本的に違う。

こうした被害者意識を根底に持ち続ける中
 国と北朝鮮・韓国との融和には、今後数百年
 間と言う風化時間が必要と覚悟する必要がある
 ろう。従って、日本の謙虚な歴史認識が日本
 人の考える以上に必要と思う。

但し当然のことながら、中国の強欲な覇権
 拡大には毅然とした態度で挑むべきである。

日本は、外国である米国の後ろ盾を必要と
 する国防上の弱点を抱えているので、中国は
 日米の意識のズレを利用して、好き放題な事
 をしてきている。

何れ、日本も核装備を必要とする時が来る
 かもしれない。

三月講演要旨

「天智天皇の謎解き」

隆 恵

大化の改新の中大兄皇子・天智天皇と
 言えば、日本人なら誰でも知っている歴
 史上の有名人物である。飛鳥時代の前半
 を牛耳っていた蘇我氏・大伴氏・阿倍氏
 の大豪族を排斥して、天皇中心の律令制
 国家を形成した英名君主という位置付け
 になっている。

しかし、天智の事績や人物像について
 の日本書紀の記録は、数多くの謎を秘め
 ている。

戦後解禁されたこの天智の実像解明
 も、学者は大化の改新の大半の治績を後
 世のモノを繰り上げて創作したとするの
 みで、彼の謎の解明に手を打てないでい
 る。その最大の原因は、一つに論証する
 明確な文献や考古学上の資料がないため
 である。

そこで、この謎解きを仮説と推論で迫
 ってみようと言うのが、今回の私の狙い
 である。

自由原稿

春の夜の月

―東西の名作・名曲に描かれている―

小田紘一郎

一、間もなく春、春の景物には様々なものがあるが、その一つに春の夜の月がある。東西の名作・名曲に書かれている春の夜の月のいくつかの場面が、つれづれに思い出されてきた。

二、楽劇「ワルキューレ」

ワグナーのオペラ・楽劇は、どれも壮大で美しいメロディに満ちている。そして、その背後には、思想的、哲学的な考えがある。最大の傑作である「ニーベルングの指環」は、完成までに実に二十六年間の月日を要し、演奏時間も十五時間にも及ぶ大作である。二番目の作の「ワルキューレ」は第一作「ラインの黄金」が、権力と富の象徴である指環をめぐる激しい闘争であるのに対し、純粋な人間関係（恋愛、父と娘、夫婦等）が多く出てきて、メロディの美しさも加わって、人気

高い。

敵人、フンディングの家で、偶然に運命的な出会いをするジークムントとジークリンデの双子の兄妹は、近親相姦的な恋に陥るのであるが、その背景をなすのが春の夜の月(満月)である。開かれたドアから入ってきたものは、人間ではなく月であり春であった。そして愛の二重奏が始まる。「冬の嵐は去り、快い月となった」。「柔らかな光に包まれ春は輝いている」。「愛と春とはむすびつけられた」と歌うムントに対し、リンデは返し歌で「寒い冬の日々に私が憧れていた春こそあなたです」。「まるで凍てつく荒野の中で初めて友に会ったよう……」と応える。この愛の二重奏は、長々と続く。二人は結婚し恋の逃避行、ムントの戦死によって恋は終る。生れた子供が英雄ジークフリート、三作目の「ジークフリート」において、永遠の女性である「ブリュンヒルデとの愛もまた美しい音楽がバックをなす。後に、ジークフリートは悪人により殺され、葬送行進曲に乗って厳かにライン河の地を運ばれる。やはり月夜である。いつと書いてはないが、おそらく冬の月と解釈した方がよからう。妻、ブリュンヒルデの心と体

が凍っている為である。これらのいずれの愛も破滅する。愛と死の一致である。又、「トリスタンとイゾルデ」の愛の二重奏も感動的、狂乱的と言ってもよい。この情緒的かつ官能的な二人の愛の背景をなすのは、夏の夜の月である。

三、源氏物語

春の夜の月は、源氏物語においても光源氏と朧月夜との恋に描かれている(花宴の巻)。密事後、藤壺との恋がうまく行かない(当然である)光源氏(左大臣側)は、敵方右大臣家の娘との恋に陥る。朧月夜と呼ばれるこの女性は、光の兄にあたる朱雀帝に興入りすることが親によって決められていた。

積極的、情緒的、官能的なこの女性は、ワグナー作品の中に出てくる女性の中のイゾルデに一番似ているように思える。それにしても光源氏の恋は破天荒であり困ったものである。父の妃の藤壺、兄の妃になるべき朧月夜、息子の嫁である秋好中宮と言った女性達との恋である。朧月夜は、有明の君とも呼ばれるが、有明月は陰暦二十日過ぎの月で、明け方まで空に残っているのではあるが、この

女性は、余程、光源氏の印象に強く残っていた女性なのである。この恋により、男は須磨流罪へ、女は中宮を棒に振った訳である。二人は二十年たつて再会するが(若葉上巻)、美しい情景と文章で綴られており、うらやましきもあつてか、私の好きな場面である。

源氏物語と月と言えば、ぜひ触れておかなければならない事がいくつかある。

(1) 須磨では、仲秋の名月が出てくる。又、六条御息所との別れ(賢木の巻)も秋の月である。

(2) 朝顔の巻の一文「人の心を移すめる花、紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光あひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしみてこの世の外の事まで思い出され、おもしろさもあわれさも残らぬものなれ、すさまじき例に、言ひおきけむ人の心浅きよ」(清少納言批判か)。美意識がよく表れているところであり、紫式部は、冬の月が好きだったのである。

(3) 女楽(若葉下巻)は、六条院世界の栄華の極点に催された女四人(女三の宮、明石姫君、明石の君、紫の上)による合奏会で、絢爛豪華たるものであるが、これを境に、この世界は

下向、崩壊に向っていくのである。この情景をなすものは、春の朧月夜である。源氏物語の中で最も読みたい場面である。

(4) 宇治十帖の世界で薫と大君の恋は、肉体の結びつかない精神的な愛であり、愛を滅ぼさせない為に女は結婚を拒否する。そして死に到る(物が枯れるよう)が、それを惜む薫の心の凍る様を描くべく、背後をなすのは冬の月である(総角の巻)。匂宮と浮舟の恋は、官能的、情緒的で薫の精神的なものとの対比をなす。二人の男性に同時に愛された女は川に身を投げる(浮舟の巻)。

(5) 更に源氏物語をよく読むと
○十三夜 明石の君と契る時(明石の巻)そしてやがて二人の結びつき、幸へ
○十五夜 夕顔との恋の場面。二人の絶頂期、やがて愛は欠けていく(夕顔の死によって)(夕顔の巻)、季節は八月。

○十六夜 未摘花への思い、やがて失望(未摘花の巻)等。月の状態を微妙に書き分けている。男と女の立場と心を細心の筆で表わしているのではないか。

四、「戦争と平和」

トルストイの「戦争と平和」もこれまた大作であるが、春の月の場面が、どこかに描かれているかと思ひ読み返してみたが、岩波文庫版では見つけられなかった。しかし筑摩文庫版の中に、朱線でぬりつぶされたのを発見した。その本の購入日は、四十一年と記されているので、役所に入って二年目の頃、いろいろ悩んでいた時である。この頃、源氏物語にも興味をもった。前者を読み返して見ると、ロシアの田舎の風景が美しく描かれており、心を惹き付けられるのであるが、主人公(アン・ドレイ公爵)が月の夜の美しさに胸をおどらせて、少女(ナターシャ)の声を聞く背景が描かれている。

「歓喜と更生の、いわれなき春めいた感じにおそわれた」「人生は三十一歳で終るものではない」「全生活を一変せしめた」。

この場面は、源氏物語において、北山で光源氏が美少女紫の君(若紫)を垣間見た場面に非常に良く似ているように思える。つけ加えれば、これまで「戦争と平和」には何回かトライしたが読み切れず、全体の筋も思想もよく理解できていない。

源氏物語も長い物語ではあるが、五十四巻

に分けられていることが、非常に読み易くしていることを感じる。

「源氏物語」と「戦争と平和」を比べてみて、その類似点、相違点を整理してみたら面白いと思っているし、今後の楽しみと課題にしていきたいと考えている。

五、「ピアノ協奏曲第一番」

音楽で春の月で思い出されるのは、ショパンの曲である。美しい叙情的なメロディが多くある曲の中でピアノ協奏曲一番は、特にそうで若い頃によく聴いた。

第二楽章は、ロマンシエと呼ばれているが、やはり春の夜の月も歌っている。ショパン自身の言葉によれば、「美しい春のおぼろ月夜を想像しながら、なかばロマンチックな思いで、なかば憂鬱な気分で作曲した」となっている。私の持っているレコード、CDは名ピアノリスト、アルツール・ルビンシュタインのものである。

六、「月光」

音楽と月と言ったら、どうしてもベートーベンの「月光」に触れなくてはなるまい。ベ

ートーベンの音楽には、九つの交響曲のみならず三十二曲のピアノソナタや十六曲の弦楽四重奏等々、交響曲に劣らない名曲が多くあり、我々を楽しませ、心を豊かにしてくれる。

この月光というピアノソナタは第十四番の曲である。詩人レルシュターブによれば第一章を聴いて「月光に映えるスイスのルツェルン湖の波にゆらぐ小舟のようだ」としている。

いつと季節は書いてないが、おそらく秋ではないか。瞑想的、哲学的な静かな曲である。

ベートーベンのピアノソナタ後期のものには、なかなか聴いていて心に響く良いものがあるが、その中に三十から三十二番の三つのソナタがある。

寝る時など、これをかけておいて寝てしまうことがよくあり、今でも私が一番聴いている曲々である。なお、二十九番は「ハンマークラヴィーア」と呼ばれている大曲であるが、井上靖の作「流沙」を読んでいたら、この曲が出てきて大変嬉しくなった。男は考古学者、女主人公はピアニストである。

ベートーベンの恋は、片思い、愛への憧憬が多く極めて精神的である。ワーグナーの場合は、官能的なものが多いが、精神性の強い

ものもある。タンホイザーなどは、この官能(肉体的)と精神の相克を描いている。

七、これまで私の頭にあるいくつかの春の夜の月を見てきたが、文学・音楽等において、恋愛の場面の背景として、これが重要な役割を担っていることを改めて感じた。

さがせばまだまだありそうだ。季節と月が見事に結びついている。精神的な愛には、春の月、情想的、官能的な愛は夏の月、瞑想的、哲学的な愛には秋の月、絶望的な愛には冬の月がよく似合うようだ。

もちろん、日本の叙情歌でも、春の月が歌われている。現在の歌からこのような情緒(ものあわれ)が失われていることは淋しい。こう感じるのは昔の人間なのであろうか。

今年の春は、これらの事に思いを寄せつつ、楽しみたいと思っている。木の芽も霞にうちけぶり、紅梅の花芽も赤みを帯びてきつつあるし、桜のつぼみも日々大きくなってきている。待ち遠しい春はもうすぐである。

幹事よりのお知らせ

会員の中山喬央さんが急死されました。たまたま、中山さんに電話をして悲報を知った小田紘一郎さんが、以下のような弔文を寄せて下さいました。なお、家族葬とのご意向でお知らせは、二月例会となりましたが、柴田さんからも弔文を頂戴しました。

中山さんの死を悼む

小田 紘一郎

一月十七日、中山さんから葉書を頂いた。「まんじ」五冊分を送ってくれたお礼に、長崎のカステラを送ったが、それへの丁寧な御礼と、今年大学入試に出された源氏物語の件(夕霧の巻)についての貴君の考えを二十二日の合評会で聞きたいと印されていた。ワープロで打ち込まれた心のこもった葉書であった。

夕霧の件について私のところに文章がないので、FAXでも送って貰おうと(二月八日)電話したところ、奥様が出られ「十六日になくなりました」とのことであり、あまりにも突然のことなので信じられなかった。直ちに「まんじ」事務局の太田さん、「史遊会」の平山さん、新井さんに電話を入れた。

中山さんとのつき合いは、私の場合あまり長くはないが、それでも四〜五年位にはなるうか。会合では隣の席が多く、夜の席などで

も親しくお話をさせていただいた。

今年、中山さんに相談して「まんじの会」に入会、原稿の投稿について相談すると「思い切つて好きなことを書くように」と言ってくださった。「つれづれの源氏物語」として五年位かけて書こうと始めたばかりである。

また、もう二年位前になろうか、暑い真夏の一日、私の源氏物語の講演会に、今は亡き下山さんと来て下さり、その後感想等を語つて下さつた思い出もある。

中山さんは、何より人間的暖かき、ヒューマニティに富んでおり、心が大きくかつ細心さを併せ持ち、物事に対する真摯な対応、高齢でありながら思考の軟かさ、全体に対する配慮、気配り等があり、清らかで賢い青年のように思われた。

中山さん本当にありがとうございます。合掌。
御冥福をお祈りします。

中山さんを悼む

柴田 弘武

中山さんが亡くなった、と聞いて吃驚仰天しました。

昨年11月の史遊会討論会「勝海舟と福沢諭吉」で、ひとり福沢諭吉擁護の論陣をはつて一歩も引かず、持論を展開していた姿が昨日のように浮かびます。芯の強い人だと思いました。

聞けば中山さんは銀行を退陣して、60才

にして考古学を学び始めたというのですから、その未知なるものへの探究心は尋常なものではありません。そしてその学問的成果が漸く実り始めた矢先のことだったように思います。きつと大きな心残りがあったのではないのでしょうか。私にとつてもこれから中山さんの教えを請いたいと思うことが多々残つてしまいました。

中山さんはいち早く拙著『全国「別所」地名事典』をお求め下さつた上、二〇〇七年の「史遊会通信」一六〇号の「今年感動した三冊の本」で、その一冊に挙げて下さいました。また翌年の一七一号の「感動した三冊の本」でも、『産鉄族才氏』を取り上げてくださるなどの光栄に浴しました。

しかも拙著に載せた宮城県中新田町の別所の項で、蘇武氏の伝承について書いてあるところに目をつけられ、銀行時代の同僚に蘇武氏に縁があるという方を思い出され、その方と連絡を取り、私の蘇武氏紹介の部分が正しいことを確認された上で、「日本列島における鉄の生産は：先ず弥生時代、東北で開始され、それが序々に東日本に伝わる、其の一方で、朝鮮半島の鉄も西日本に交易品としてたらされた」と考える方が整合性に富むと考えた次第である。」(「史遊会通信」一九二号)と書いて下さっています。中山さんの学問にいきさかでもお役に立ったことを今は慰めとするばかりです。突然の訃報に言葉もありません。どうか安らかに眠りください。